

映画では石原裕次郎がデビューしていた。タフガイである。裕次郎は長い脚と純情を持って

余して「いかすぜ」と言っていた。映画は、総天然色シネマスコープになっていた。裕次郎の「嵐を呼ぶ男」のドラム合戦は壮絶であった。同級生の兄貴が、すぐに影響されてドラムセットを買った。2、3回、ドラムをたたいていたが「やかまし

と隣のおじさんに怒鳴られて、母親が納屋へしまっ

た。この同級生の兄貴はマイトグアイ小林旭の「ギターを持った渡り鳥」を見ると、すぐに影響さ

憧れの目活スター

れてギターを買った。親も甘やかし過ぎである。「馬も欲しか」といつていたが、さすがに親もそこまでは甘やかさなかった。馬を買ってやれば、あの人ならさすがいの旅をしていたかもしれない。

ニヤリと笑う殺し屋の穴戸

錠、タンフガイの二谷英明、誰もが日活スターに憧れていた。わが家に遊びに来ていた和子姉さんは「赤木圭二郎は好い」と言っていた。あの時代の若者は、誰もが裕次郎も旭も赤木圭



おかべ・こうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。

んは苦々しそにいつていた。和子姉さんは泣いたのだろう。しばらくして、憧れの人、和子姉さんは松浦を離れた。「ほくの恋人東京へいっちうち」であった。星塵にも巡回映画が回って来ていた。早鹿小学校の校庭にスクリーンを張って映すのである。映画は高峰秀子の「銀座方ンカン娘」であった。スクリーンは風でゆがんでいた。高峰秀子の顔もゆがんでいた。その晩は、和子姉さんも祖母の旅館に泊まっていたのではないか。松浦を離れる別れのあいさつであった。顔には希望と書いてあった。(松浦市出身)